

19. 肝細胞癌の局所抗癌剤注入療法

—肝シンチ、CT像の変化

今枝 孟義 山脇 義晴
 又吉 純一 加藤 敏光
 柳川 繁雄 鈴木 雅雄
 土井 健吾
 (岐大・放)
 河田 良
 (同・2外)

過去3年間に、抗癌剤局所動注を施行した32症例の内、肝癌発見時から1年以上生存した5例を対象として、その経過観察中の肝シンチ、CT像の変化につき検討を加えた。

抗癌剤の注入量は、総肝動脈内に挿入したcatheterよりMMC 20~30mgを注入し、さらに1~2か月後に2回目を、それ以後は3~6か月に1回の割で動注を施行した。動注と動注の間は5-FU 250~500mg/日か、5-FU dry syrup 200mg/日を投与した。動注回数は2~5回、生存期間は1年3か月~2年4か月(内、1例は現在生存中)である。

一般に肝癌の予後は、腫瘍が大きいものは小さいものに比べ、肝硬変症が有るものはないものに比べ、AFP値が高いものは低いものに比べて悪いといわれているが、対象症例では腫瘍の大きさは5例中3例が手拳大以上であり、肝硬変症はすべてに認められ(内1例に腹水あり)、 AFP値は3例が 10^3 ng/ml以上であった。肝シンチ像を数か月単位で比較すると目立った変化を認めなかつたが、全過程を通してみると、すべての例で経過とともに欠損像の増大、増加を認めた。動注によって延命効果はあったが、癌の発育を完全に抑えることはできなかつた。

CTは肝シンチ上の欠損像の大きさが目立つて変わらない場合でも、中心壊死を検出するなど治療効果判定に役立つた。腫瘍内の壊死は動注2~3か月後に出現し、その増大、増加をきたした。またこれら症例のCT上の特徴的所見は腫瘍の輪郭がenhanceによって濃染された(capselによる)ことである。

20. 胸部 ^{67}Ga スキャンの臨床的検討

亀井 哲也 山崎 俊江
 立野 育郎
 (国立金沢・放)

対象:原発性肺癌22例、転移性肺癌9例、縦隔腫瘍5例、炎症性疾患10例の計46例につき臨床的検討を行なった。

結果ならびに考案:肺癌非照射例11例の ^{67}Ga スキャン陽性率は82%であった。照射例11例の陽性率は73%であった。転移性肺癌9例の陽性率は89%、炎症性疾患10例の陽性率は40%であった。組織型別による陽性率は腺癌は2例中2例、扁平上皮癌では9例中8例、未分化癌では3例中3例、燕麦細胞癌では1例中1例、細胞診のみの4例では3例が陽性であった。集積をみなかった2例は、いずれも照射例であった。組織型別からみた ^{67}Ga スキャン集積濃度は、腺癌で最も高く、次いで未分化癌、燕麦細胞癌、扁平上皮癌の順であった。腫瘍の大きさからみた ^{67}Ga 集積濃度には差はみられなかつた。

組織型別の集積濃度は、従来の報告とやや異なり、腺癌、未分化癌でやや高濃度の傾向が見られたが、今後、さらに検討しなければならない。

放射線照射例11例と非照射例11例の検討では著明な差を認めなかつた。予後との関係もあり、今後さらに検討していきたい。

21. ^{67}Ga 乳房集積例の検討

松田 博史 利波 紀久
 大口 学 久田 欣一
 (金大・核)

今まで当科で施行された530例の Ga スキャン中女性14例、男性1例に乳房集積をみた。年齢は20~30歳代がほとんどを占めた。両側に著明な集積をみた4例中3例に乳汁分泌がみられ、両側に軽度集積9例中6例になんらかの薬剤服用の既往がみられた。また、片側に著明な集積をみた例は

乳房悪性腫瘍例であった。唯一の男性例は17歳の片側性女性化乳房症の症例で同側に軽度集積をみた。乳房に Ga が集積する原因として、血中のホルモン level, 特にエストロゲンとプロラクチンとの関与が報告されている。しかし、われわれの症例でこのホルモン level の変化で説明しうるのはわずか15例中 6 例にすぎず、Ga の乳房集積には今まで報告されていない他の因子も関与していると考えられる。

22. 骨スキャンによる骨外性集積例について

東 光太郎	山岸 利明
宝田 陽	利波 久雄
小林 真	宮谷 博久
浜田 重雄	西木 雅裕
山本 達	興村 哲郎
宮村 利雄	

(金医大)

二谷 立介
(福井県立・放)

^{99m}Tc -リン酸化合物の骨外性病変部への集積例が、今まで多数報告されている。今回われわれは、 $^{99m}\text{Tc-MDP}$ による Bone Scan で、骨外性腫瘍部への集積例を 3 例経験したので報告する。

3 例は、未分化細胞癌の肺原発巣への RI 集積例 1 例、肺腺癌肝転移の肝転移巣への RI 集積例 1 例、肝細胞性肝癌の肝原発巣への RI 集積例 1 例である。

3 例とも単純 X-P にて、石灰化陰影を認めなかつた。

3 例のうち、未分化細胞癌の肺原発巣への $^{99m}\text{Tc-MDP}$ の集積例、および肺腺癌の肝転移巣への $^{99m}\text{Tc-MDP}$ の集積例は、われわれの知るかぎり初めての報告と思われる。

23. $^{99m}\text{Tc-MDP}$ におけるリンパ系シンチグラフィー(その2)

小林 英敏	佐々木常雄
仙田 宏平	三島 厚
松原 一仁	石口 恒男
改井 修	真下 伸一
大鹿 智	児玉 行弘
大野 晶子	

(名大・放)

$^{99m}\text{Tc-MDP}$ により、リンパ管が描出されることは前回報告した。今回は、基礎的検討に、(1)右手背に皮下注射し、リンパ管が描出されている時の左右静脈血中 RI 量を測定し、差が無いことを確認し、(2)両足背に皮下注射し、その局所の RI カウントの減少する状態は、広範子宫全摘術後症例と、それ以外とでは差を認め、その原因是早期に運ばれる RI 量が、広範子宫全摘術後症例で低下しているためと考えられた。応用として、広範子宫全摘術後症例で、下肢に軽度の浮腫を認めた 2 症例に、両足背に $^{99m}\text{Tc-MDP}$ おのおの 2 mCi 皮下注射した。両症例ともに、浮腫を認めた下肢は、RI の上昇は中途でブロックされ、RI はリンパ管外に漏出しているのが認められた。

24. Anti HA, Anti HBc キットの基礎的検討

金森 勇雄	木村 得次
市川 秀男	鶴田 初男
(大垣市民・特放)	
中野 哲	北村 公男
(同・第2内)	
綿引 元	武田 功
佐々木常雄	

(名大・放)

われわれは過去約10か月間、RIA 法により、Anti HA と Anti HBc を測定してきた。今回はその kit の基礎的検討について報告した。

結論(I) Intra-assay variance: Anti HA の CV はおのおの 0.8, 4.4%, Anti HBc は 1.3, 43.8% で